愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要第22号
2021.5
45-56p

安城市鹿乗川流域の旧河道

- 遺跡群共通の遺物包含層「K層」-

永井邦仁

愛知県安城市東部の沖積低地にある鹿乗川では、その流域に弥生時代～中世の遺跡が集中する。これまでの発掘調査で蛇行する鹿乗川の旧河道が検出され、堆積状況と出土遺物によって平安時代中期までに完全に埋没してその跡地が小区画水田に利用されていることが明らかになってきた。

本稿では、耕作地化によって生じた中世以前の遺物を包含する黒褐色系土層が鹿乗川流域の一帯に広がっていることを確認し、これを遺跡分布範囲の手がかりとすべく「K層」と呼ぶことを提案した。

1. はじめに

愛知県の西三河地域にある安城市には、碧海台地東縁に沿って南流する鹿乗川がある。鹿乗川から東方は矢作川まで続く沖積低地であるが、特に鹿乗川周辺では弥生時代～中世の集落遺跡が集中している。安城市教育委員会では1970年代以来、愛知県埋蔵文化財センターでは平成10年度以来、当該地域での発掘調査を継続している。その過程で、弥生時代～古墳時代に機能していた旧河道を調査してきた。旧河道を取り巻く鹿乗川流域遺跡群は範囲が広大であるだけでなく、弥生時代後期から古墳時代前期には他地域との交流拠点になっていたことが明らかにされてきた（考古学フォーラム2013）。本稿では、この交流拠点の形成から衰退が旧河道と密接な関係にあったとする視点に基づき、旧河道の埋没過程を整理し、その埋没後の土地利用に注目してみたい。

2. 鹿乗川の旧河道

遺跡の発掘調査に関連して現出される旧河道には2パターンある。すなわち考古学的な遺構として検出される旧河道（遺構記号はNR）と、試錐（ボーリング）調査や遺構基盤層の深掘り調査（後述）による地質学的な見地から現出されるものである。

まず前者であるが、鹿乗川流域の発掘調査で検出された旧河道遺構は40地点以上ある【表1】。埋土は黒褐色系のシルトを主体とし、一時的な水流の痕跡である砂や灰白色粘質シルトが間層でみられることから、湿地状であったと推測される。それに加えて、集落遺構付近では弥生時代中期後葉～古代の土器や木製品が多量に出土する。遺跡の発掘調査報告書では当該部分を「（自然）流路」や「旧河道」と呼ぶことが大半であるが、河川堆積全体から見ればその末期的な状況にすぎない。

そこで当センターの鹿乗川流域における発掘調査では基盤層上（最終遺構面）の遺構調査完了後に、深掘り調査として重機による断ち割りで地質構造の確認を行っている。これによって、河川堆積による基盤層上に集落などの遺構が形成されたことを確認し、旧河道の変遷をうかがい知ることができる。これが後者のパターンであり、前者はその一部ということになる。前者との違いは、大半が無遺物の砂やシルトなどから構成される側方付加堆積物となっているため、人為的な遺構の扱いにはならない点である。本稿では、これらを区分するために前者を湿地堆積部、後者を河川堆積部と呼ぶこととする。なお深掘り調査では、現出された地層断面での観察によって河川堆積構造を見出すとともに、放射性炭素年代測定用のサンプリングを行ない、その結果によって河川堆積（各層）の時期を推定する手法がとられている。

また鹿乗川流域の発掘調査では、粗粒砂などを主体とする一見して基盤層とは異なる堆積層の範囲が見られ、旧河道の可能性が高い不明遺構として検出されることがある。それを掘削す

ると近世以降の遺物が出土することもあるが、大半は無遺物層であるため、先述の分類でいえば後者（河川堆積部）に相当する。よって遺構の規模はあまりに大きく、最終的には深掘り調査によって深度や堆積構造を確認するしかない。このような場合、平面規模を推測するために古い地割[1]を参照する歴史地理学的な手法をとることになる。それによると、天保２年（1831年）に始められた開鑿[2]によって直線的になった現・鹿乗川の河道の周囲に蛇行する旧河道の痕跡がみられる【図１左】。もちろん不明遺構が河道以外の溜池や水路、耕作地などの可能性もあるが、以下で提示するものについては旧河道の可能性が高いと考える。

3. 各遺跡の旧河道と埋没後の様相

鹿乗川上流から順に、旧河道の堆積状況とそれが埋没した後の包含層形成について、各遺跡の様相を確認していく。なお旧河道は特に断らない限り湿地堆積部に相当する。

野辺遺跡　鹿乗川旧河道の判明する北限の遺跡である。主に鹿乗川流域遺跡群の野辺地区として発掘調査が行われている。第１次調査のＩ～Ｎ地区で確認された堆積構造によって、遺跡の西半部が河川堆積部に相当するものと考えられ、その流れは概ね南北方向である。湿地堆積部に相当する遺構はＫ地区のNR02～06があり、弥生時代中期後葉～後期の土器が多く出土しているだけでなく、NR02・03は近世の河道（西鹿乗川）とみられる。

彼岸田遺跡　野辺遺跡の南側に位置する。主に鹿乗川流域遺跡群の彼岸田地区として発掘調査がなされている。第２次調査Ａ・Ｂ・Ｃ地区では、北東から南西方向とみられる溝や旧河道（Ａ地区NR1など）が検出されているので、野辺遺跡から下った旧河道が南西方向へ曲がっていることがわかる。Ａ地区NR1は幅約15mあり、その上位にはSD2・３があり掘り返しを受けているようで主に弥生時代後期（山中式～欠山式）の土器が出土している。土層断面図によれば、各遺構の下位で西方へ展開する堆積構造が河川堆積部に相当するとみられる。そこから南へ下ったＢ地区SD4やSD6・７では後者で

表１　鹿乗川流域で確認された旧河道（概ね北から南へ）

遺跡	調査区	遺構名	出土遺物の時期（時代）	概要
鹿乗川流域遺跡群	1次I・J地区	＊基盤層断面	不明	各地区西端部の基盤層が河川堆積部
	1次K～N地区	＊基盤層断面	不明	各地区基盤層全体が河川堆積部
	1次K地区	NR01	弥生後期・７世紀後葉	地区西端、木材含む
		NR02	江戸	地区西端、NR02→NR03の順
		NR04	弥生後期	断面図のみ、詳細不明
		NR05	弥生後期後半	NR05→NR04の順、木材含む
		NR06	弥生中期後葉～後期	東の上端が旧河道左岸に相当
	1次E地区	NR02		基盤層が河川堆積部
	1次F地区	NR01	弥生後期後半～古墳中期	基盤層が河川堆積部
	1次G地区	＊基盤層断面	弥生後期後半～古墳中期	黒灰色粘土層あり、2次J地区NR1へ
	1次Z1トレンチ	＊基盤層断面	不明	河川堆積部か
	S-1地区	NR1	鎌倉～江戸	下位のSD15で古代墨書土器
上橋下遺跡	01A区	SX02	鎌倉	墨書山茶碗、獣骨出土
	02区	NR01	鎌倉～江戸	下位に01A区SX02
彼岸田遺跡	平成15年度区	NR1	弥生後期～平安	上層で墨書土器多量出土
鹿乗川流域遺跡群	2次A地区	SD2・3・NR1	弥生後期	SD2・3の下にNR1
	2次B地区	SD4	弥生後期	SDの下に旧河道堆積あり
	2次C地区	NR1・2		木製品あり
	2次D地区	SD6・7・8	SD6・7弥生中期中葉、SD8七世紀	SDの下に旧河道堆積あり
	2次E～I地区	＊基盤層断面	弥生中期中葉以前	各地区西端の基盤層が河川堆積部
	2次J地区	NR1	弥生中期後葉～平安	木製品あり
	2次K地区	＊基盤層断面	弥生後期前葉以前	SD1の下に河川堆積部
	2次L・M地区	＊基盤層断面	不明	各地区端部の基盤層が河川堆積部か
	2次Q地区	＊基盤層断面	不明	地区東部の基盤層が河川堆積部
	3次H地区	SD9	奈良後期	墨書土器、木製祭祀具
	4次B地区	SD05	奈良～平安	
	4次C地区	SD23	弥生後期後半～古墳中期	中狭間遺跡溝状遺構へ続く
	4次E・F地区	SD19	奈良～平安	SD19の下位にSD20
	4次E・F地区	SD20・SD10	弥生後期後半～古墳前期	SD20の上位にSD19
	4次G地区	SD14	奈良～平安	4次E地区SD20と同一か
	4次J地区	SD04	弥生後期～古墳前期	4次C地区SD23へ続く
宮下遺跡	第1次調査	第1トレンチ	～古墳前期	幅10m以上、深さ1.5m以上か
中狭間遺跡	第1次調査	A・B・C地点	弥生～	4次C地区SD23から続く
亀塚遺跡	第1次調査	黒土層	弥生後期～古墳前期	左岸
	19区	003NR	弥生後期～古墳前期	左岸、遺物は右岸に集中
	20C区	119NR	江戸	ほぼ全体が旧河道の粗砂
姫下遺跡	05B区	NR01	古墳初頭～古墳前期	NR02の上位、06C区001NRと同
		NR02	古墳初頭～古墳前期	NR01の下位、木質含むラミナ堆積
	06C区	001NR	古墳初頭～古墳前期	05B区NR01と同
寄島遺跡	14E区	＊基盤層断面	鎌倉～江戸？	左岸基盤層上に竪穴建物跡
	13B区	＊基盤層断面	弥生後期～江戸	左岸に井戸、上位に複数の河道
	13A区	＊基盤層断面	江戸	ほぼ全体が旧河道の粗砂
	11A区	021NR	弥生後期～古墳前期	北側に湿地状凹地伴う
	11B区	003NR	弥生中期後葉～古墳初頭	埋没後水田耕作
	16区	001NR	弥生中期後葉～古墳初頭	11B003NR左岸の続き
下懸遺跡	16区	001NR	弥生中期後葉～古墳初頭	調査区南端から約4m分
	13B区	053NR	弥生～古墳	09C・B・A区へ続く
	13A区	006NR	江戸	
	09C区	001NR	弥生～平安	13B区053NR～09A区001NRの中間
	00B区	NR01	弥生	NR01の上位に00A区NR02
	00A区	NR02	弥生～奈良	NR01南側上位、木簡
	09A・B区	026NR	弥生後期～平安前期	奈良時代に大溝掘削、木簡
惣作遺跡	11B区	097NR	江戸～昭和	
	11A区	001NR	古墳初頭～奈良後期	12区008NRの右岸、木製刀把具
	12区	008NR	古墳初頭～奈良後期	11A区001NRの左岸
	08A・B区	003NR	古墳初頭～奈良後期	木簡
	04B区	NR01	弥生後期～古墳初頭	旧河道右岸
	04E区	NR01	奈良～平安	微高地東側の他とは別の河道か
	04C区	NR03	弥生後期～古墳初頭	旧河道左岸
	04A～D・F～H区	＊基盤層断面	弥生前期～中期中葉	G・H区では弥生中期後葉まで

(1) 明治時代作成の碧海郡桜井村の地籍図（地籍字分全図）やその後に作成された土地宝典を資料とする。

(2) 実質的には明治14年（1881年）以降に進展する（鹿乗川悪水普通水利組合誌編纂委員会1956）。

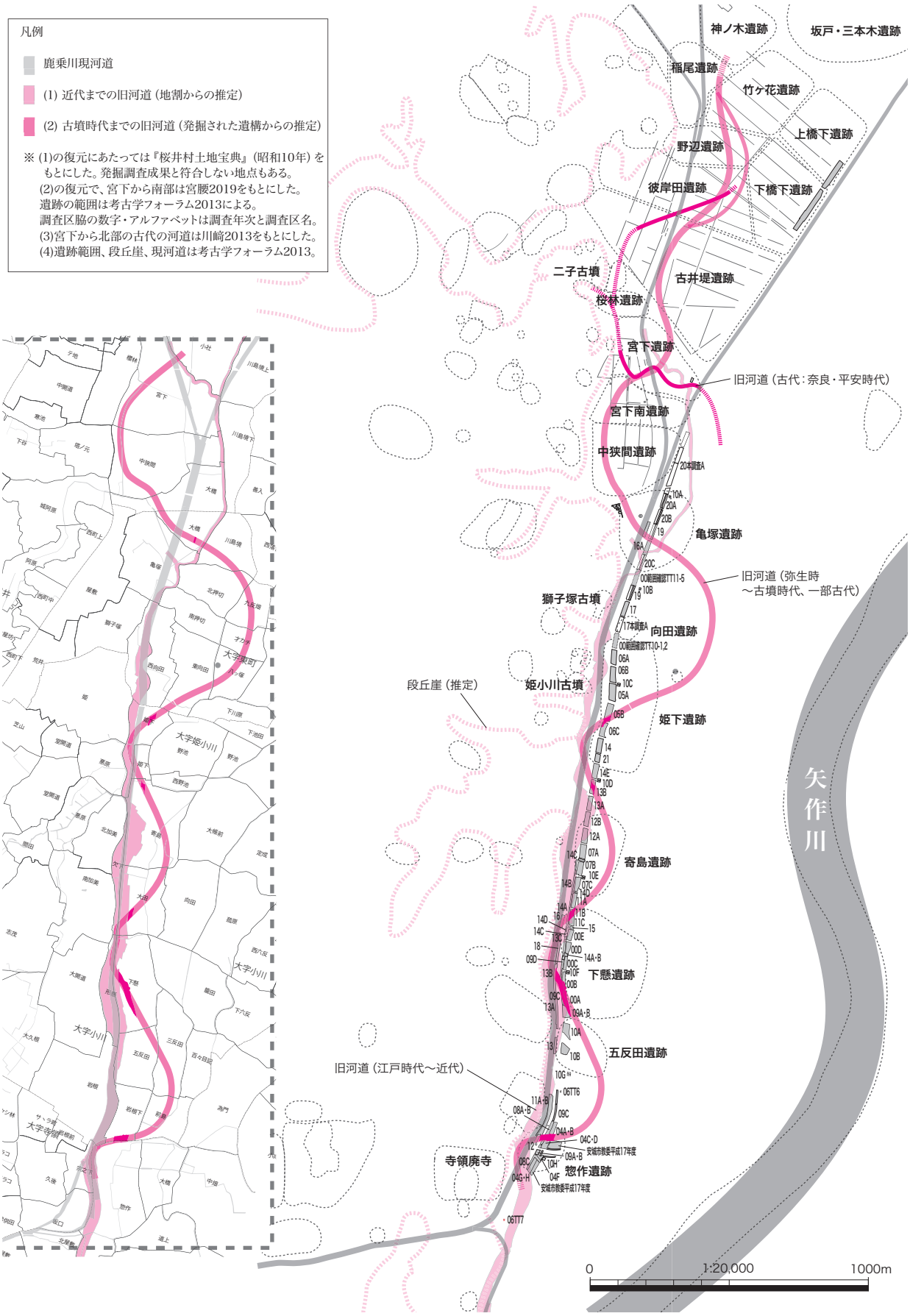

図１　鹿乗川流域における旧河道の概要

弥生時代中期中葉の土器が出土しているが、同一のものであろう。ただしD地区SD8では7世紀後葉（猿投窯編年：I-17号窯式期）の須恵器が出土しており、7世紀代にも河川堆積部に対して開鑿がなされていると考えられる。また、これらの旧河道から50～100m東方の第2次調査J地区でも旧河道NR1があり弥生時代中期後葉～平安時代の遺物が出土している。その南のK・L地区では南西方向に延びる溝が複数検出されていることから、これらの下位に河川堆積部のある可能性が考えられる。おそらく先述した旧河道から別れて外側を廻り込む別の河道があったものと思われる。

平成15年度の発掘調査区では、北東から南西方向に延びる旧河道NR1が検出されている。その下層は弥生時代後期の土器が出土しているので先述の旧河道と一連のものと考えられる。当該地点で興味深いのは、墨書された奈良時代後半の須恵器が多量（99点）に出土していることで、沖積低地における灌漑などの開発や祭祀に関わった場所と推測されている（川﨑2013）。旧河道の主な遺物が弥生時代後期であることから、奈良時代後半に開鑿された大溝である可能性が高い。

古井堤遺跡　彼岸田遺跡の南側に位置し、鹿乗川流域遺跡群の古井堤地区として発掘調査がなされている。旧河道は、第2次調査のE～H地区の西端付近の堆積構造が河川堆積部に特有のもので、彼岸田遺跡で南西方向へ曲がった河道が南方向へ蛇行する地点にあたる。同地区では溝状遺構も多く、河道に面した微高地西端を区画する目的で掘られたものであろう。また遺跡西部の第3次調査H地区でも奈良時代の溝SD9が検出されている。

宮下遺跡　昭和49年度（1974年11月～1975年2月）の安城市教育委員会による発掘調査では、第1トレンチで「溝状遺構」が検出されている。調査時の記録によれば深さも1.5m以上となり、埋土が灰白色砂層（Ⅲ層）の下に土器を多く含む灰褐色シルト（Ⅳ層）、黒色粘土層（Ⅴ層）があることから、多量の土器廃棄後も水流があったと推測される。出土遺物は、層位との関係は不明ながら古墳時代中期（須恵器含む）までが顕著である。この旧河道を南西方向へ延長すると鹿乗川流域遺跡群4次調査E地区SD20を経て、中狭間遺跡の「溝状遺構」へ至ると想定されている（川﨑2003）。

包含層についても興味深い。平成14年度の安城市教育委員会による発掘調査では、最上位の遺構面(1)で古墳時代中期前半（神明式Ⅱ段階）の竪穴建物跡や、8世紀後葉の土師器三河型長胴甕が出土する総柱（3間×3間）の掘立柱建物跡SH1が検出されている。遺構面は須恵器・灰釉陶器・山茶碗を包含する黒褐色粘質土層で覆われており、同層の上面かどうかは不明だが水田区画とみられる小溝が検出されている（安城市教育委員会2013）。また黒褐色土層下部に顕著な凹凸があることから、同層は削平や攪拌を受けながら形成されたと考えられる。これに関連して、遺構面(1)では小溝群（SD06など）が検出されており、耕作地化が想定されている（安城市教育委員会2013）。SD6からは8世紀中葉～後葉の須恵器・土師器・製塩土器が出土しており、耕作地化はおそらくSH1の廃絶以降とみられる。

中狭間遺跡　昭和54年度（1979年）の安城市立桜井小学校敷地における発掘調査地点は、鹿乗川流域遺跡群の中狭間地区に相当する。発掘調査では南北に延びる「溝状遺構」（安城市教育委員会1999）が検出されている。その規模は幅9.5～13.5m、深さ1.3m以上である。埋土中から弥生時代後期～古墳時代前期の土器や木製品が多量に出土している。埋土は中間の灰白色粘土層を挟んで下層（Ⅰ層）の砂質の多い淡黒褐色粘質土と上層（Ⅱ層）の植物質を多く含む黒色～黒褐色粘土層に区分される。灰白色粘土の堆積はきわめて緩やかな水流によるもので、状況の変化があったと考えられる。

平成13年度の発掘調査では（鹿乗川流域遺跡群第4次）、「溝状遺構」から北東側上流部分が確認され、古墳時代中期までの遺物が出土している（C地区SD23、E・F地区SD20、G地区SD04）。一方E・F地区SD20の上位でSD19やその東方G地区SD14は全く方向の異なる旧河道で、北西方向にある開析谷（桜林遺跡）から流出したものの続きとみられる。これらの旧河道は奈良・平安時代の遺物が出土しているので、古墳時代中期以降に河道の転位が起

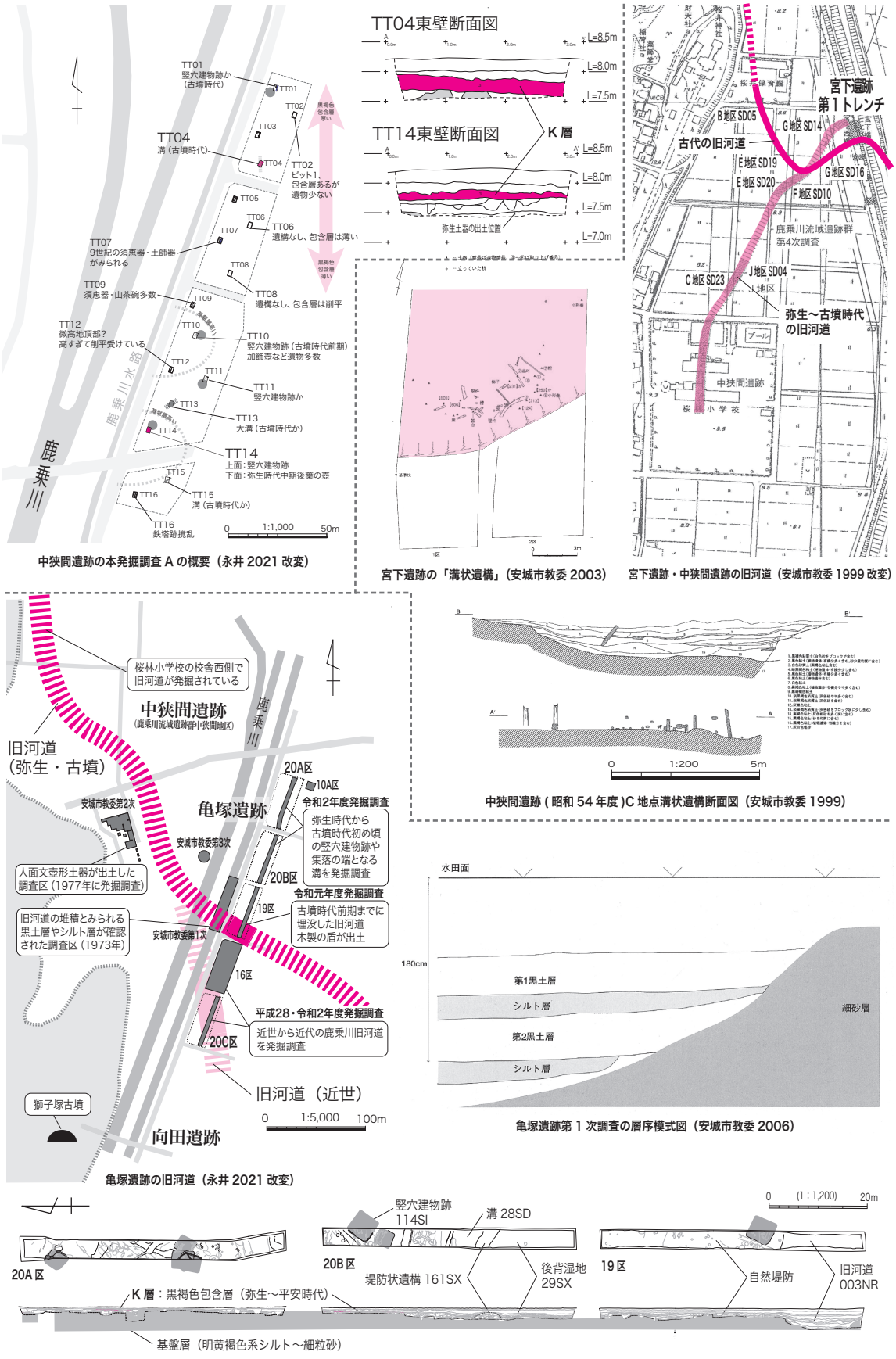

図 2　宮下遺跡・中狭間遺跡・亀塚遺跡の鹿乗川旧河道と遺物包含層

きたと推測される。

なお当該遺跡では耕作土 0.2 ～ 0.5m 下で基盤層（灰黄褐色土層など）に達し、そこで弥生時前期～平安時代の遺構が検出されている。遺物包含層や基盤層が削平された状態であり、比較的高い微高地であったとみられる。当該微高地から東方の区域で行われた令和 2 年度に行われた当センターの本発掘調査 A では、計 16 か所のトレンチで黒褐色系シルトの遺物包含層が確認され（永井 2021）、こちらは微高地の下り傾斜に相当する。

亀塚遺跡　昭和 48 年度 (1973 年 11 月～ 1974 年 1 月) の安城市教育委員会による第 1 次調査では、植物質や土器を多量に含む黒色土層が検出され、旧河道の左岸に相当すると考えられる。その埋土は、中狭間遺跡の「溝状遺構」に似ており、粘土質灰白色シルト層を挟んで上下 2 層の黒色土層となっている。遺物はそれぞれの黒色土層に集中しており、土器は大半が弥生時代後期後半 (欠山式に相当) のものである (安城市教育委員会 2006)。一方、人面文土器が出土した第 2 次調査区でそれに該当する遺構はなく、旧河道は両調査区の間を抜けていると考えられる。なお、令和元年度の愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査（19 区）では、調査区南端で旧河道（003NR）が検出されている。当該地点ではほぼ東西方向に延びている。埋土は植物質（自然樹木など）を多く含む黒褐色シルトが主体で、古墳時代前期の土師器が多量に出土している（鈴木 2020）。第 1 次調査地点の湿地堆積部から続くものと思われる。【図 2】

ところが 19 区南側の 16 区では顕著な集落遺構がなく、近世以降の耕作に関わる溝に限られている。その基盤層をトレンチ掘削したところ、シルトと砂の互層が確認され、調査区南端のシルト層中で弥生時代中期末の細頸壺が完形の状態で出土している（永井 2017）。このことから 16 区の地点は 19 区の湿地堆積部に先行する河川堆積部で、弥生時代中期末～後期にかけて形成されたものと考えられる。一方、16 区南西端では近世以降の流路が検出され（永井 2017）、南側の 20C 区でも近世～近代の陶器を含む粗粒砂主体の互層であることが判明した（永井 2021）。したがって、亀塚遺跡では弥生時代～古墳時代の旧河道の南側を近世以降の旧河道が切り込んでいることになる。

19 区の湿地堆積部を挟んだ両岸で比較すると、右岸（16 区）は自然堤防状の高まりで基盤層そのものが削平を受けている。これに対して左岸（19 区・20A・B 区）は、それとほぼ同じ標高の遺構面で弥生時代の集落遺構が検出されていることから、右岸より左岸が低い。ただし 20A 区南半部では、表土下で黒褐色系シルトの遺物包含層が残存しておらず削平を受けているとみられ、ここでも比較的顕著な微高地であったと推測される。

姫下遺跡　平成 17 年度の 05B 区と、平成 18 年度の 06C 区の発掘調査では、北東方向から南西方向へ延びる旧河道が確認されている。06C 区では南東岸のみ、05B 区では北西と南東の両岸が検出され、北西岸は大きな形状変化はみられないのに対し、浅いテラスを有する南東岸は時期によって大きく変化する。05B 区の土層断面によれば、テラス部分は河川堆積部に相当し（05B 区 NR02）、湿地堆積部に相当する河道（05B 区 NR01）によって切り込まれている。古墳前期第 1 段階では、NR01 は 05B 区南西隅部でほぼ直角に屈曲してそこから 06C 区 001NR の深い部分へと連続していたが、同第 2 段階では屈曲点から南側が埋没して NR01 がほぼ東西方向に直線的になる。テラス部分が拡張されたようにみえる。屈曲点付近では 4 か所の杭列分布が確認されていることに加え NR01 が「直線化することや、西部では断面が V 字状を呈していることから人為的な掘り直し」（愛知県埋蔵文化財センター 2012）とみられている。なお杭列は河道に対して水制となる方向であることから、灌漑や船着き場の可能性が考えられる【図 3 中右】。

05B 区 NR01（06C 区 001NR）の 3 層からは古墳時代前期の土師器や建築部材など多量の木製品が出土している。その下層は、暗褐色シルトにやや砂が混じる層（4 層）、遺物のないシルト層（5 層）が続く。一方 3 層の上面は細かい凹凸があって耕作を受けた可能性があり、その上位である黒色・黒褐色粘土（2 層）からは、8 世紀後葉～ 9 世紀前葉の須恵器や灰釉陶

器（猿投窯編年：O-10 号窯式期～ K-14 号窯式期）が出土する。さらに褐灰色シルト（1 層）は中世の遺物を含んでいる。06C 区の湿地堆積部の南東岸では 2 層の直下で多量の土師器小片が密集して出土している（06C 区 234SU）。234SU は河道と平行に分布し、06C 区の土層断面【図 3 下】によれば 001NR の 3 層の堆積より前の段階であることから、湿地堆積部が河道として機能していた段階に土器などの廃棄場所になっていたと考えられる。

寄島遺跡　遺跡範囲の最北部に位置する 13B 区では、主に調査区東半部で旧河道の湿地堆積部がみられ、弥生時代後期～古墳時代前期の土器や木製品が多量に出土している。13B 区西壁での深掘り調査では、それに関連する河川堆積部が確認されている。特に南西隅部を中心にそれまでとは異なる堆積物の運搬方向がみられる範囲があり【図 4 上のトーン部分】、さらに

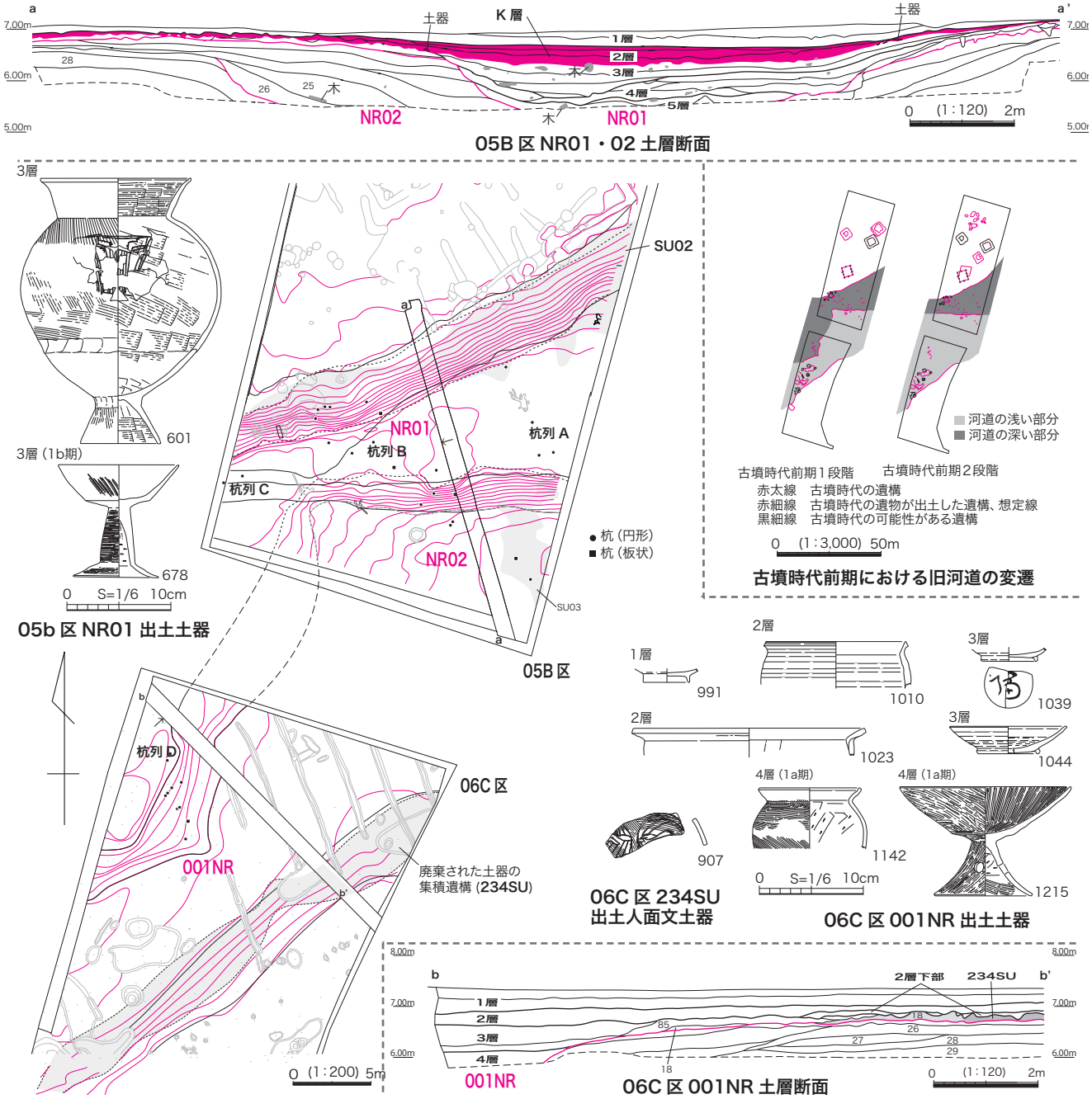

図 3　姫下遺跡の鹿乗川旧河道と遺物包含層（愛知県埋蔵文化財センター 2012 改変）

その最下位層にあたる「黒褐色腐食質粘土層」で採取された試料（草本）によって行われた放射性炭素年代測定の結果、1415-1336（AD535-615）cal yrs BP(PLD-26737) という数値年代が得られ、当該層の堆積が 6 ～ 7 世紀に近い年代の可能性が高い（鬼頭 2017）。しかし掘削深度の限界のため、堆積構造から他の河川堆積部との関係を明らかにできていない。

一方、弥生・古墳時代集落の南端に位置する 11A 区の南端から 11B 区では、北東方向から南西方向へ延びる旧河道の湿地堆積部が検出されている。その右岸にあたる 11A 区の河川堆積部上面（集落遺構の基盤層上）には、湿地状堆積部（11A 区 008NR）河道の方向と平行する溝状の窪み（11A 区 018NR）がある。008NR と 018NR の間は幅約 8m の堤防状の高まりで、018NR は旧河道の埋没過程で生じた後背湿地である。11A 区 008NR とは対照的に左岸の 11B 区 003NR では多量の土器や木製品の廃棄がなされている。土器の時期や出土位置からするとさらに南側に位置する下懸遺跡の集落に関わるものとされる（愛知県埋蔵文化財センター 2017）。またその層位をみると、左岸から約 3m の傾斜の先は腐食土と砂のラミナ堆積となっており【図 4 下】、湿地堆積部であるが比較的水流のある状態だったことがわかる。

11B 区では、黒褐色粘質シルト層が旧河道 003NR から基盤層まで連続して覆っており、当該層では畦畔状の高まりが検出され断面では小さな凹凸が多数みられ、水田耕作によって生じたものであろう。これと似た状況が、平成 19 年度の発掘調査で検出された削平された古墳の周溝（07C 区 3001SD）にみられる。3001SD の平らな底面から上へ約 0.2m までは古墳時代の土器だけを含む層であるが、さらに上位はラミナ状堆積が攪拌された層で、9 世紀代の灰釉陶器や山茶碗が出土している。このことから古墳は中世段階まで墳丘形状を保っており、その周溝で耕作の行われていた可能性が考えられる【図 4 中】。

下懸遺跡　平成 21 年度の発掘調査では、09C 区と 09A・B 区の 2 地点において旧河道の一部が検出されている。09A・B 区では旧河道の湿地堆積部が検出されている。その下位は河川堆積部となるが、中礫層（図 5 下の 37 層）がみられるので一時的に水流の強い時期があったとみられる。09B 区北壁の土層断面によれば、河川堆積部は湿地堆積部よりさらに西方へ広がり、河川幅は約 20m になると推測される。

09A・B 区では、湿地堆積部が大きく 3 層（NR-1 層～ 3 層）に区分されている。最下部の NR-3 層は下端で古墳時代初頭、上端で 7 世紀前半（猿投窯編年：H-15 窯式期～ I-101 窯式期）の遺物を含んでいる。同層は開鑿を受けており、平らな底面と明瞭な立ち上がりが土層断面にあらわれていることから、それは幅約 6m の大溝状である【図 5 下】。大溝状の掘り返しは、概ね湿地堆積部と同じ方向に延びており 09B 区では北東方向への分岐点があることから、区画や運河の機能を目的としたものであったと考えられる。この埋土（NR-2 層）は 7 世紀後半～ 9 世紀（猿投窯編年：I-17 号窯式期～ K-90 号窯式期）の木器や木簡を含んでいることから、開鑿時期は 7 世紀後半～末にかけてと考えられる。【図 5】

NR-2 層の上部はほぼ水平に削平されており、黒色の強い黒褐色シルト層（NR-1 層）が堆積する。NR-1 層の上面は水田の畦畔が検出され、断面には顕著な凹凸がみられることから耕作面と推測される。また NR-1 層の上から掘り込まれた溝 61SD からは 10 世紀前半（猿投窯編年：O-53 号窯式期）の灰釉陶器が出土しているので、NR-1 層の堆積から耕作までの時期は 9 ～ 10 世紀と考えられる。

平成 25 年度の発掘調査は、鹿乗川と同排水路の間で行われ、南北に細長い 2 調査区（13A・B 区）が設定されたが、その大半が旧河道の堆積で占められている。北半部の 13B 区では 09C 区などへ続く古代以前の旧河道（湿地堆積部）が検出されている（愛知県埋蔵文化財センター 2018）。ここから 09A・B 区までを見通すと、左岸に比べて攻撃面となる右岸の傾斜が強く、先述のように一部に中礫層がみられるのもこのためであろう。また南半部の 13A 区では、近世の旧河道 006NR が南方向へ抜けている。

惣作遺跡　平成 16 年度～平成 24 年度の発掘調査では、04A・B 区、08A・B 区、11A 区

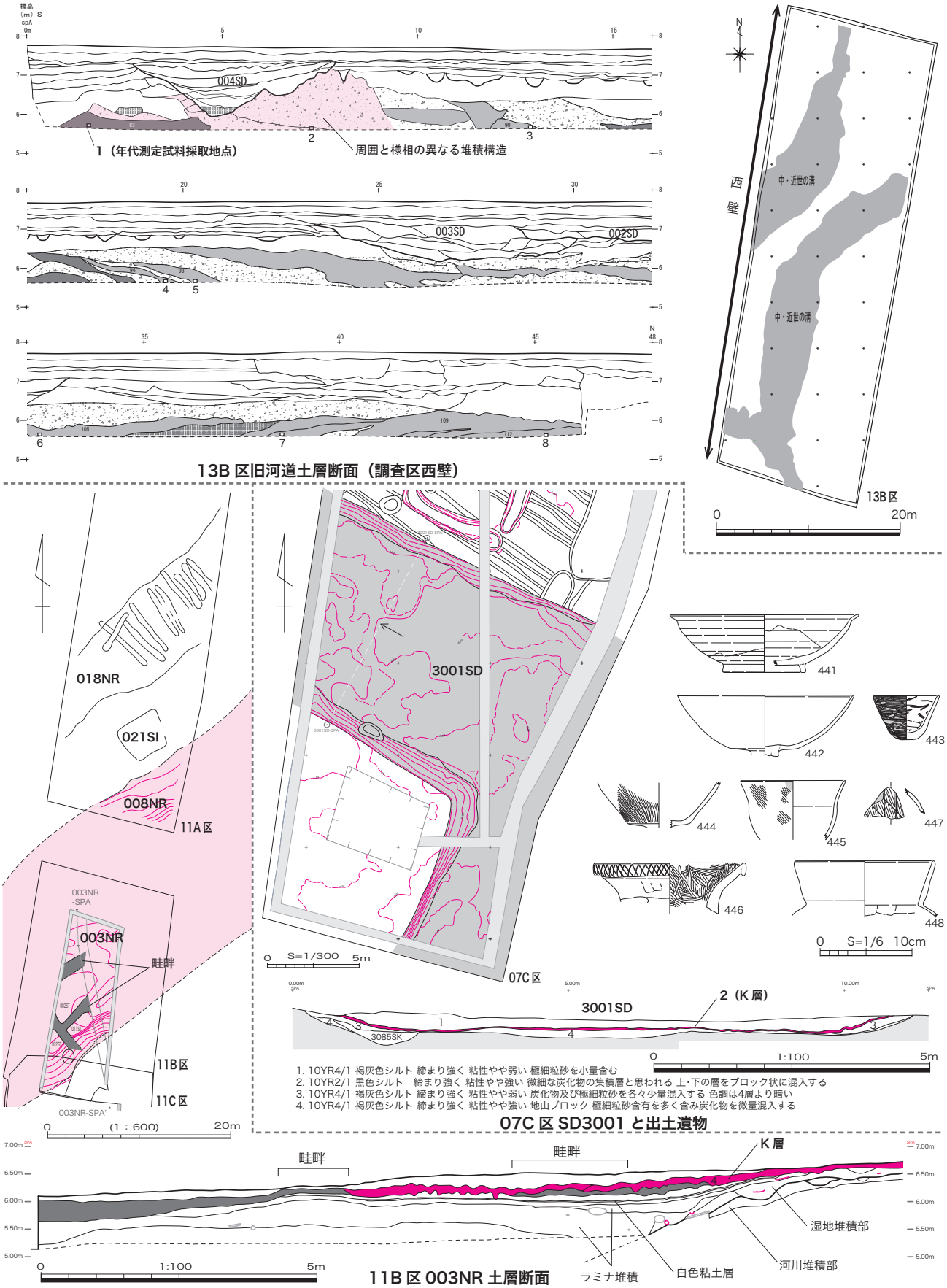

図４　寄島遺跡の鹿乗川旧河道と遺物包含層（愛知県埋蔵文化財センター 2017 改変）

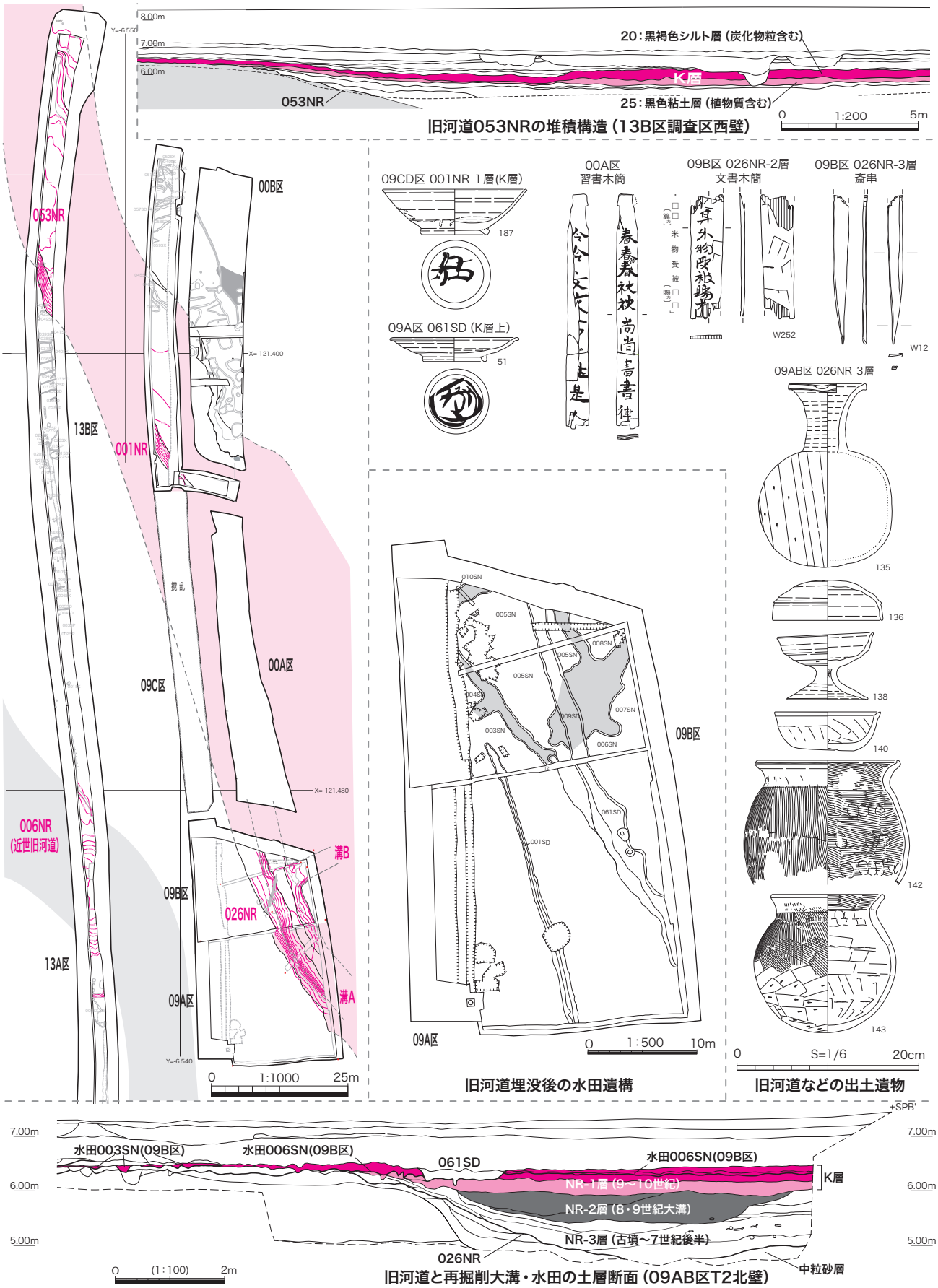

図５　下懸遺跡の鹿乗川旧河道と遺物包含層（愛知県埋蔵文化財センター 2007・2018 を改変）

などで旧河道の湿地堆積部が検出されている。その変遷は、概ね弥生時代前期後半～弥生時代中期後葉にかけて、屈曲する旧河道が西方に移動しつつその左岸微高地が拡大傾向となり集落域となっていく。そして古墳時代前期（尾張地域の廻間Ⅱ式～松河戸式併行期）には多量の土器や木製品の廃棄を伴う旧河道の埋没が進行する。古墳時代中期～７世紀代は遺物が減少して周辺の状況が不明となるが、旧河道の完全な埋没は８世紀以降になるとみられる（愛知県埋蔵文化財センター 2012）。

８世紀以降の状況は以下のようになる。08B 区（003NR）では植物質の多い黒褐色粘土（第５層）と粘質土層（第４層）が堆積し、出土遺物は大半が古墳時代であるが第４層には７～８世紀の須恵器が含まれており、このことから最上部は奈良時代に堆積が進んだのであろう。また 08A 区 003NR では「呉部足国」などと記された木簡が出土しており、湿地堆積部の上部が下懸遺跡のような大溝として機能していた可能性もある。これは、周辺で当該期集落や西方台地上に古代寺院（寺領廃寺）が造営されたことも関連していると考えられる（宮腰 2019）。ただし 08B 区 003NR の土層断面によれば、第４・５層の上部は第３層によって削平されているため不明である。同様に 08A 区の竪穴建物跡 077SB は、出土土師器甕から８世紀後葉～９世紀初頭の時期とみられるが、旧河道右岸（08A 区 003NR）へ連続する黒褐色シルト層とさらにその下層によって削平されている。このことから、９世紀以降に湿地堆積部を含めた一帯の平坦地化がなされたことになる（図６下）。08B 区 003NR の第３層からは９世紀後半（猿投窯編年：黒笹 90 号窯式期）の灰釉陶器が出土し、第２層でも墨書のある灰釉陶器皿がみられる。これらが包含される状況として９世紀後半～ 10 世紀に広範囲の整地が行われて居住地から耕作地へと変化したものと考えられる。【図６】

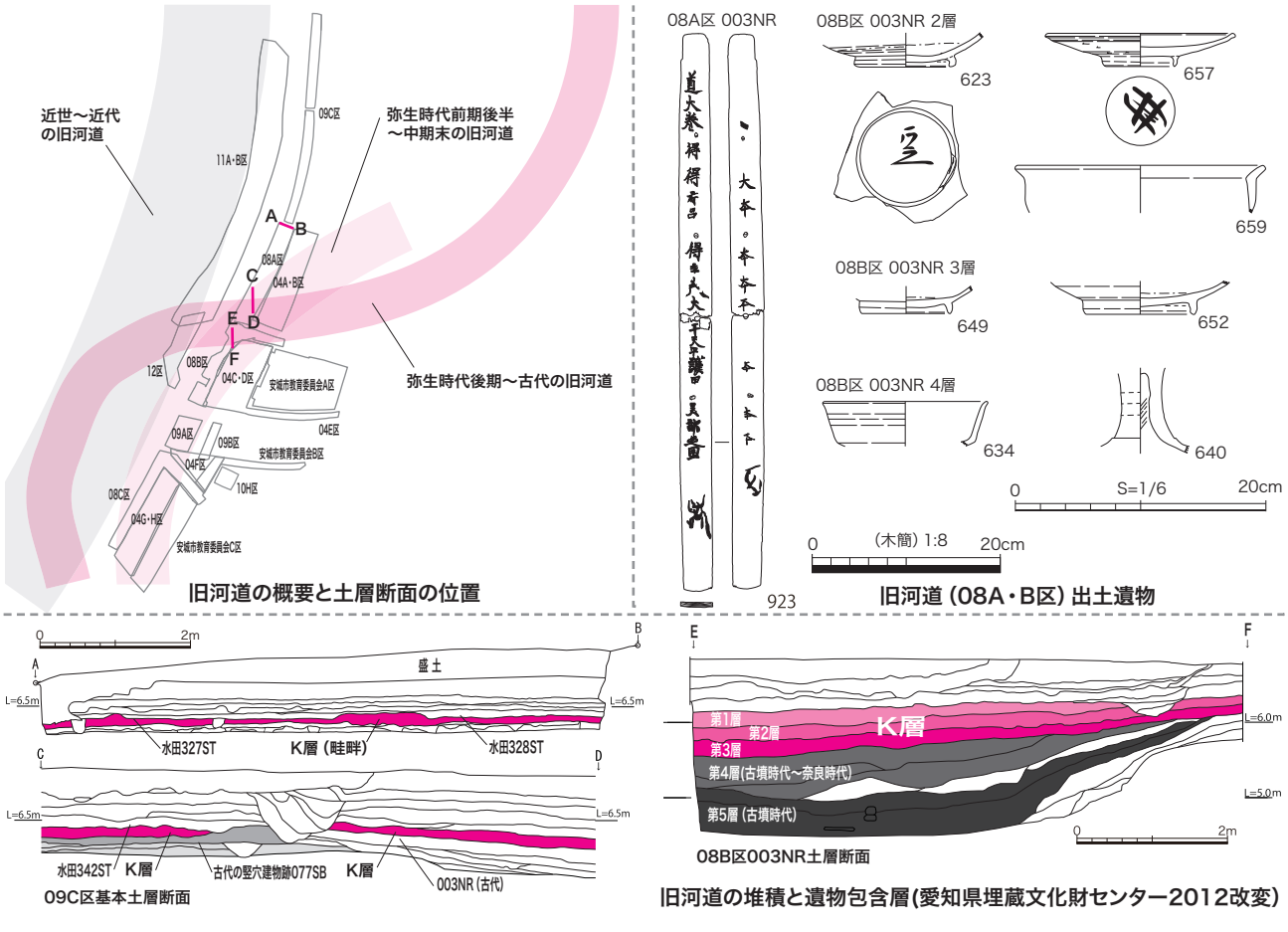

図６　惣作遺跡の鹿乗川旧河道と遺物包含層（愛知県埋蔵文化財センター 2012・2018 改変）

4. まとめ - 鹿乗川「K 層」について -

以上のように、弥生時代～古墳時代の鹿乗川旧河道は 9 世紀代までに埋没が完了する。その後 10 世紀にかけて形成された黒褐色系シルト層で河道跡からその周辺は連続して覆われ、これに耕作地化が関わっている。同層からは山茶碗も出土するので、この状況は 12 ～ 13 世紀頃まで継続していたと考えられる。

ただし河道埋没の進度は地点ごとに差があり、姫下遺跡・寄島遺跡周辺では古墳時代前期にはほぼ埋没していたとみられるのに対し、下懸遺跡では 7 世紀後半、惣作遺跡では 8 世紀後葉まで河道の水流が継続している。これは鹿乗川が、複数ある碧海台地の開析谷を水源としていることと関連しているのであろう。例えば、8 世紀半ばすぎ（猿投窯編年 :NN-32 号窯式期）までに彼岸田遺跡・宮下遺跡で河道転位が起きている。これは墨書土器祭祀の存在も考慮すると人工的な改変の可能性もあるが、それによって上流からの水流が停止しても、下流では別の開析谷からの湧水によって水が得られたと考えられる。なお、姫下遺跡や惣作遺跡では 10 世紀後半（猿投窯編年：H-72 号窯式期）の灰釉陶器が出土する集落遺構がある。これらは周辺での耕作地化が進むなかで最後まで残った集落となるが、後者は古代寺院（寺領廃寺）の廃絶時期にも関わっていると考えられる。

こうして黒褐色系シルト層によって鹿乗川流域における古代以前の景観はリセットされ、現在ある農耕生産を主体とする景観へと変貌することになる。すなわち同層の存在は、遺跡群変遷の大画期の一つを示すものと位置付けられる。そこで筆者は、黒褐色系シルト層を「鹿乗川流域共通の遺物包含層」の意を込めて「K 層」と呼び、平安時代の耕地開発だけでなくそれに先行する集落や旧河道が遺跡として残存している指標とすることを提案したい。「K 層」によって遺跡の範囲や微地形復元の手がかりが得られればと考えている。

なお、寄島遺跡 13B 区の地質構造については鬼頭剛氏のご教示を得た。

引用・参考文献

愛知県埋蔵文化財センター　2009『下懸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 144 集
愛知県埋蔵文化財センター　2012『姫下遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 168 集
愛知県埋蔵文化財センター　2012『惣作遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 172 集
愛知県埋蔵文化財センター　2017『寄島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 204 集
愛知県埋蔵文化財センター　2018『宮下遺跡・下懸遺跡Ⅱ・五反田遺跡・惣作遺跡Ⅲ』愛知県埋蔵文化財調査報告書第 210 集
安城市教育委員会　1999　『中狭間遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 6 集
安城市教育委員会　2003　『宮下遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 11 集
安城市教育委員会　2006　『亀塚遺跡Ⅰ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 16 集
安城市教育委員会　2008　『鹿乗川流域遺跡群Ⅴ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 21 集
安城市教育委員会　2011　『鹿乗川流域遺跡群Ⅶ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 26 集
安城市教育委員会　2013　『宮下遺跡Ⅱ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 31 集
岡安雅彦　2009「第 4 章 まとめ」『鹿乗川流域遺跡群Ⅵ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 23 集
岡安雅彦　2011「第 4 章 総括」『鹿乗川流域遺跡群Ⅶ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 26 集
鹿乗川悪水普通水利組合誌編纂委員会　1956『鹿乗川悪水普通水利組合誌』
川﨑みどり　2003「まとめ」『宮下遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 11 集
川﨑みどり　2013「第 5 章 総括」『彼岸田遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 30 集
鬼頭剛　2017「第 4 章 第 1 節 岡崎平野中央部、寄島遺跡における堆積環境」『寄島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 204 集
考古学フォーラム　2013『変貌する弥生社会 - 安城市鹿乗川流域の弥生時代から古墳時代 -』資料集
鈴木恵介　2020　「亀塚遺跡・向田遺跡」『年報 令和元年度』愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁　2021　「亀塚遺跡」「中狭間遺跡」『年報 令和 2 年度』愛知県埋蔵文化財センター
永井宏幸　2017　「亀塚遺跡」『年報 平成 28 年度』愛知県埋蔵文化財センター
宮腰健司　2019　「鹿乗川流域遺跡群の再検討（Ⅰ）」『研究紀要』第 20 号　愛知県埋蔵文化財センター